

2025年度第3回 医療法人社団主体会倫理委員会 会議記録の概要

開催日時	2025 年 12 月 17 日 ~ 2026 年 3 月 31 日
開催場所	迅速審査
出席委員	市原、川合、長田、原、小西、今村、水谷、大塚、中西、坂（敬略称、順不同）
研究計画変更の審議	
申請者	相和 大揮
研究名	脊椎圧迫骨折患者の予後に影響を与える因子の検討
研究内容 要旨	脊椎圧迫骨折は骨粗鬆症のもっとも一般的な症状であり、Quality of life（以下QOL）、Activities of Daily Living（以下ADL）に関しては、体幹伸展筋力や腰椎可動性が関連していると報告されている。しかし、回復期リハビリテーション病棟入院中の患者では、骨傷部の保護、疼痛のためにそれらの評価を行えない患者も多く、予後の把握が遅れる可能性がある。そこで今回、入院時及び初期に可能な身体負担の少ない評価指標の中で、退院時歩行能力に関連する因子を明らかにし、退院時の歩行能力を予測することを目的とした。
審議結果	承認 2022-8-2
意見	研究内容の変更はなく、共同研究者の追加のみの変更であるため、迅速審査で承認としました。
新規研究計画の審議	
申請者	野呂 賢汰
研究名	訪問リハビリテーション利用者における入浴者の実態 ー浴室環境や介護環境要因に着目してー
研究内容 要旨	当院では訪問リハビリテーション(以下、訪問リハ)に取り組んでいる。訪問リハとは、在宅生活において日常生活の自立と社会参加を目的として提供されるサービスのことと定義されている。中でも入浴に関する相談も多く、身体機能の向上に取り組むことや福祉機器の提案をする場面も多い。その中で通所系サービスに対して不満を抱いている利用者も少なくなく、ご自宅で入浴したいと希望される方も多い。そこで本研究では当院訪問リハ利用者で自宅入浴群と通所系サービスを利用している群に分け、身体機能や浴室環境が入浴方法にどのような影響を与えているかを分析し、今後の訪問リハにおける自宅入浴の支援の一助となることを目的とした。
審議結果	継続審査 2025-9
意見	侵襲を伴わない研究であって介入をおこなわないものに関する審査と考え、迅速審査を行いました。①「通所系サービスに対して不満を抱いている」との文言は誤解を招く可能性があり、書き方の変更を。②環境因子で、浴室出入口の段差の有無、手すり設置の有無(出入口、浴室)は必要では。③評価項目がたくさんあり、色々なスケールで評価しているが、ADLなど個人差が大きいくどのように評価されるのかわからないの意見があり、継続審査としました。

新規研究計画の再審議	
申請者	野呂 賢汰
研究名	訪問リハビリテーション利用者における入浴者の実態 －浴室環境や介護環境要因に着目して－
審議結果	承認 2025-9-2
意見	前回指摘された箇所は修正されており、特に問題ないと考えられ、承認としました。
新規研究計画の審議	
申請者	山口 篤彦
研究名	DCS-200Si の透析量モニターDDM 機能の有用性
研究内容 要旨	日機装製の多用途透析用監視装置(コンソール)のモデル DCS-200Si では、透析排液のUV 吸光度変化率を連続的に測定することで、標準化透析量(Kt/V)を算出することが出来る。Kt/V とは、1回の透析で総体液量の何回分を綺麗にしたかを示す、透析効率の指標であり、DCS-200Si の導入により採血無しでその日のKt/Vを知る事が出来るようになった。この度 DCS-200Si 導入時から、採血結果等から算出されるKt/V の値とコンソールによる測定値を比較、統計し DCS-200Si の Kt/V 測定機能の有用性を調査する。
審議結果	継続審査 2025-10
意見	軽微な侵襲を伴う研究であって介入をおこなわないものに関する審査と考え、迅速審査を行いました。その結果①公開文書がない(別紙様式第十五号が必用)。②匿名化の徹底(別紙様式第十九号が必用)。③5名で相関が求められるか。④研究期間は1ヶ月でよいのか。⑤データの保管期間の見直しをなどの意見があり、継続審査としました。
新規研究計画の再審議	
申請者	山口 篤彦
研究名	DCS-200Si の透析量モニターDDM 機能の有用性
審議結果	承認 2025-10-2
意見	前回指摘された箇所は修正されており、特に問題ないと考えられ、承認としました。

新規研究計画の審議	
申請者	山本 耕平
研究名	当院訪問リハビリテーション終了者の特徴と関連因子について ～目標達成による終了者に着目して～
研究内容 要旨	臨床において、訪問リハビリテーション(以下、訪問リハビリ)を終了する患者の選定や目標設定に悩む場面に直面する。また、研究対象期間(2023年1月から2025年10月)の当院訪問リハビリの利用可能枠に対しての利用率は平均で95.8%であった。新規利用者の受け入れをするためには、訪問リハビリの終了(卒業)を目指していく必要がある。そこで、目標達成による終了者の特性を明らかにし、短期介入が可能である患者を予測する事、訪問リハビリ終了に向けた目標設定に役立つ事、訪問リハビリの短期介入可能者は短期介入を目指すことで、新規利用者の受け入れを円滑化する事を目的とする。
審議結果	継続審査 2025-11
意見	軽微な侵襲を伴う研究であって介入をおこなわないものに関する審査と考え、迅速審査を行いました。その結果、「目標達成群の基準が不明確である」、「別紙様式十五号の研究目的の説明文の「終了する患者の選定」は事業所の都合とともに捉えられる」などの意見があり、継続審査としました。
新規研究計画の再審議	
申請者	山本 耕平
研究名	当院訪問リハビリテーション終了者の特徴と関連因子について ～目標達成による終了者に着目して～
審議結果	承認 2025-11-2
意見	前回指摘された箇所は修正されており、特に問題ないと考えられ、承認としました。
新規研究計画の審議	
申請者	朝倉 夢斗
研究名	当院外来血液透析患者における予後予測因子の検討
研究内容 要旨	本研究の目的は当院外来透析患者の定期検査(種々の画像検査、動脈硬化検査、血液生化学データ、透析関連データ、体力評価データ)の結果を後方視的に分析し、予後に影響する因子を検討することです。フレイル・入院・死亡をアウトカムとし、関連を認めた因子に着目して早期から介入することで、生命予後改善につながる可能性があると考えます。

審議結果	承認 2025-12
意見	侵襲を伴わない研究であって介入を行わないものに関する審査と考え、迅速審査を行いました。その結果問題ないとの結論になり、承認としました。
新規研究計画の審議	
申請者	大西 優衣香
研究名	病棟内歩行が自立している脳卒中患者の退院先に影響を及ぼす因子の検討
研究内容 要旨	脳卒中患者を対象としてFIMを用いた在宅復帰に関連する因子を調査した先行研究は数多く存在し、自宅退院が可能であったケースにおいては退院時の運動項目合計点数FIM運動項目が高値であっても高次脳機能および認知機能障害が退院先に及ぼす影響を検討した報告は少ない。そこで、本研究では歩行FIMが自立している脳卒中患者が自宅退院不可能となった要因を調査することを目的とする。
審議結果	継続審査 2025-13
意見	侵襲を伴わない研究であって介入を行わないものに関する審査と考え、迅速審査を行いました。その結果、「研究の科学的合理性の根拠が研究の目的及び意義とほぼ同じ内容となっており、研究の科学的合理性の根拠が示されていない」などの意見があり、継続審査としました。
新規研究計画の再審議	
申請者	大西 優衣香
研究名	病棟内歩行が自立している脳卒中患者の退院先に影響を及ぼす因子の検討
審議結果	承認 2025-13-2
意見	指摘された箇所は修正されており問題ないと考えられ、承認としました。
新規研究計画の審議	
申請者	岸田 知也
研究名	当院回復期重度片麻痺患者における退院先を決定する因子について ～FIMと基本動作に着目して～

研究内容 要旨	本研究は、ADLと基本動作に焦点を当て、退院時のFIM各項目、基本動作の中でどの項目が自宅への退院を阻害するのかについて検証し、退院先の決定因子について明瞭化することを目的とした
審議結果	継続審査 2025-14
意見	侵襲を伴わない研究であって介入を行わないものに関する審査と考え、迅速審査を行いました。その結果、「別紙様式第二号：研究の目的及び意義の項目で、参考文献等の引用先が記載されていない。別紙様式第十九号：対応表の破棄予定日が早い」などの意見があり、継続審査としました。
新規研究計画の再審議	
申請者	岸田 知也
研究名	当院回復期重度片麻痺患者における退院先を決定する因子について ～FIMと基本動作に着目して～
審議結果	承認 2025-14-2
意見	指摘された箇所は修正されており問題ないと考えられ、承認としました。